

# 「山あり、谷あり…」の向こうに見えたもの

## — この本の構成について —

橋本 賢二

### ご説明

初めて見ていただける方もおられるかと思えます。これはすでに14年ほど継続して作成してきた学生たちとの協同作成論集です。今年度の初めは今年から担当し始めた「英米文学概論」（前期科目）の受講者を含めて執筆者の範囲を拡大し、例年より多くの論文を集めようと奮闘していました。欧米言語文化コースの学生以外に社会文化や日本と中国の文学・文化などに関心を持つ学生が多く受講する科目でもあり、さらに幅広い世界観が表現できるのではという期待がありました。しかしながら今年度は予算が半減してその夢も実現せずに終わりました。前期に提出してくれた学生の論文には優れたものがあり、掲載を約束していたのに申し訳なく思っています。

そこで公開の手法はインターネットを中心とし、冊子印刷は極限まで部数を抑え、「全ページネット公開」を目指すこととなりました。そのためには本学の大学図書館から論文を公開する承諾書を、すべての学生から集めなくてはなりません。つまり後期に受講する学生しか執筆陣に加えることができなくなったというわけです。結局後期の「米文学演習Ⅱ」（2回生科目）と「米文学研究法Ⅱ」（3回生科目）の受講者だけがこの論集の協力者となりました。幸いにそれらの学生の多くがそれらの前期科目Ⅰを受講してくれていたことに加え、「英米文学概論」も受講していたので、分量としては多くの論考が集まりました。

### 今年の構成は

全体構成は三部に分かれていて、第一部は今年のテーマ論、第二部は主として今年度授業で扱ってきた小説について、第三部は映画についてとなっています。そこには学生が見つけてきたおススメ作品も含まれています。ただ単に作品を鑑賞するだけでなく、今年のテーマに関係付けて論じてくれるようにとお願いしてもいます。たとえば映画論のなかには今年のテーマでもある「世代間のズレや融和」「昔の人と今の人がお互いから学べること」といった観点から眺めることができる映画も入っています。これらを教材としてみんなで鑑賞し意見交換しました。

小説論や映画論は「各人が最も強い関心を持てる作品を選び、自分に一番合っている手法で論じるように」と指導しました。おかげでどちらもこれまで以上にすばらしい、個性的な論考が並んでいます。紙面の制約もあり短めですが、ネット世界では一般的な「コンパクトな字数」制限にはうまく合致しているのではないのでしょうか。